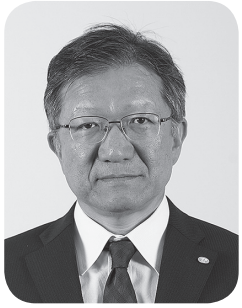
新年に“新ビジョン 2017”を語る



大　野　　達　也*

新年お慶び申し上げるとともに，この機会に新ビジョン 2017 の総括と中間評価を行いたい。私は，『ビジョン 2017 作成検討委員会』の幹事長としてこのビジョンの策定に携わり，現在，（一社）プレストレスト・コンクリート建設業協会の副会長としてビジョンの執行に加担している立場でもあるので，多少不遜な総括と評価も許されるだろう。

まず，その体系と構成。

『第 1 章 PC 事業の功績と将来への責務』として冒頭に事業見通しを示し，極力シャイさを封印して“PC 事業の功績”への，あらん限りの自画自賛。章末に PC 事業に求められる社会的要請と果たすべき責務を記述した。今後への課題の列挙だ。

課題解決型のビジョンを目指した。第 1 章で提起した諸課題への解決が，『第 2 章インフラの整備・更新への挑戦』，『第 3 章生産性向上への挑戦』，『第 4 章魅力的な建設産業への挑戦』である。これらに連なるのは，PC 技術に向ける情熱の“飾り気のない反復”である。

そして『第 5 章 PC 建協の果たす役割と今後の取り組み』，前ビジョンで定めた“市場対話”，“技術支援”，“生産支援”に，新たに“社会への働きかけ”を加え 4 つの役割とした。この“社会への働きかけ”は，意見交換会などでの発注者側からの『協会からもインフラの重要性を発信してくれないか』との要請に応じたものであると同時に，技術に忠実であるがゆえに“アピール下手”に陥りやすい協会への，自戒であり，警鐘であり，“Cheer up”でもあった。

このビジョンが発刊され，ほぼ 2 年半が経つ。ここで中間評価をしてみたい。

『第 1 章』の事業予測。“事業量漸増の絵”を描いていたが，復興関係を含む直轄工事や，高速道路，新幹線の新設橋梁で一定レベルの発注があったことに加え，大規模更新関係の工事が激増，2018 年度は 3,484 億円，2019 年度には 3,800 億円強の会員受注を予測している。PC 事業規模とともに，協会会員の責任と使命も大きくなった，と理解すべきである。

次に『第 2 章インフラの整備・更新への挑戦』。大規模更新事業に対し，会員は技術・工法の開発や工場への投資も含め，積極的に対応している。新幹線，復興道路などのプロジェクト，ミッシングリンクの解消にも存在感を発揮している。

続いて『第 3 章生産性向上への挑戦』。2018 年 6 月に『コンクリート橋のプレキャスト化ガイドライン』が制定され，それを受け発注者との意見交換会などでプレキャスト化推進への提案，働きかけを行っている。“生産性向上のフォローの風”に乗るのは今をおいてほかにはない。CIM や ICT 技術に関しては新技術導入促進Ⅱ型方式の採用など，会員が潜在的にもつ技術的辣腕を振るいうる環境となっている。

問題は『第 4 章魅力的な建設産業への挑戦』。この 2 年半で国土交通省や（一社）日本建設業連合会などの業界団体は完全週休二日の実現や建設キャリアアップシステムの普及に大きく舵を切った。本ビジョンでは“的外れ”が早期陳腐化を生むことをおそれ，結果的に踏込み不足となった。可能であれば，この章ごと，書き直してしまいたいくらいだが，産と官が真剣に取り組み，“かほどに状況を動かした”ことのマイルストーンとして，この章を残しておくのもいいだろう。

そして『第 5 章 PC 建協の果たす役割と今後の取り組み』。4 つめの役割“社会への働きかけ”を果たすべく，現場見学会や地域貢献，災害支援を行っている。いい意味で，“社会的にも注目される協会”になりつつある。

最後に，このビジョンを作成するのに，尽力してくれた『ビジョン 2017 作成検討委員会』の 15 人の同志達に触れなければならない。彼らの献身と使命感がなければ，このビジョンは生まれなかった。すなわち，このビジョンは協会のビジョンであると同時に，彼ら自身のビジョンでもあるわけだ。しからば，今頃，彼らも彼らのビジョンに対し，中間評価しているのだろうか。フォローの風に乗ってくれているのだろうか。それとも，“やり残した歯痒さ”を語るマイルストーンを見つめているのだろうか。

* *Tatsuya Ohno*：（一社）プレストレスト・コンクリート建設業協会 副会長
オリエンタル白石㈱ 代表取締役社長